

4. おわりに

中高年者が新しい技能を習得しようとする際にどのような学習上の困難を感じているか、その学習困難点を克服させるにはどのように教え方を改善、工夫したらよいか、その留意点について考察した。

中高年者が学習する際に経験する困難を理解し、それに関心をもち、その困難を克服させるための指導方法を取り入れていくことは中高年訓練を効果的にする、ひとつの道であろう。⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾さらに、本報では論じなかったが、職種選択、学習レディネスとの関連で中高年者の学習困難点の克服を考える必要がある。

また、本報では訓練を実施する立場として中高年者が苦勞している要件をなるべく取りのぞきたいという姿勢で中高年者の意見を聞いたために、あたかも中高年者が学習上の欠点ばかりを持つかのごとき印象をもたれるかもしれない。しかし、中高年者は人生経験の豊かさを代表とする長所をもっている。例えば、理解力、概念構成能力など総合的能力は若年者よりすぐれているかもしれない。このような中高年者の長所を生かした教育訓練の仕方について今後とも検討を続けるつもりである。

また、中高年者に適する訓練形態を作るために、今回のフィールド調査に加えて、実験的な手法を用いて中高年者の学習困難への対応を検討していくつもりである。その主なる方向は、①第3章で中高年者の学習困難点への対応の中で検証が十分になされていない事項を検討すること、②技能習得におよぼす加齢の影響に関して生理心理学的研究をすることである。

現代社会では、中高年者を教育訓練する必要性がますます増大するであろう。⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾公共職業訓練ばかりでなく、企業においても中高年者の教育訓練が真剣に考えられるようになっている。誰しも年をとったとはいえ、十分な授業を受ける権利は持っている。年齢による学習の困難点を克服できる教授法ができれば、中高年者の教育訓練は大きく進展すると思われる。

最後に、本調査をまとめるにあたって次の諸先生のお世話になりました。心よりお礼申し上げます。

(訓大指導科)手塚太郎先生、(東淀川高訓)中村肇一先生、(水戸技専)高橋昇先生、(茨城県職業訓練課)加藤彰久先生、(大宮高訓)小坂 功先生、(川口労政事務所)亀井益徳先生、(飯能高訓)細田義三郎先生、(長野技専)滝沢一孝先生。

注

(1) 成人のもつ学習上の特質は次のように述べられている。

諸 岡 (1 9 7 5)	ホジキン (社会教育事典) (1 9 7 1)	クルブスカヤ 花香 (1 9 7 2)
<ul style="list-style-type: none"> • 学習時間の不足 • 実利的 • 肉体的な衰え • 独自の処生観 • 自主的 • 他の要求とのジレンマ • 潜在的な学習要求 	<ul style="list-style-type: none"> • 時間が少ない • 即結果を期待 • 生き方が固定している • 自ら学習する型に • 知識は豊富だが、統合化が不十分 • 学習上失敗により挫折しやすい • 教師と生徒は友人どおしの関係 	<ul style="list-style-type: none"> • 学習が生産に結びついている • 即座に生活に適用 • 学習目的が明確である • より多様な関心がある • 学び始めに自分の力に対して確信がない • 学習素材の選択には学習者の興味を満足させる

(2) 本報でいう「教え方」とは、「計画化、組織化、指導、(Leading)、統制、に区分するうちでの指導の段階を指している。

(3) 中高年者の年齢区分を40才にしたのは、Belbin(1965)の研究に標的をおいたからである。

(4) 調査対象者の詳細は次のごとくである。

年齢段階	訓練校	大宮	長野	飯能	日立	東淀川	下館	合 計	年齢別%
	平均年齢	50.4	49.8	57.4	56.7	53.6	46.5		
	調査人数	7	9	10	6	16	10	58	100.0
41～45		3	2			3	4	12	20.7
46～50		1	3		1	6	5	16	27.6
51～55			1	1	2	3		7	12.1
56～60		3	3	9	3	3		21	36.2
61～						1	1	2	3.4

訓練校 \ 職種	調査対象の訓練職種
大宮高訓	ブロック建築
長野技専	機械、建築、電工
飯能高訓	木工
日立高訓	ブロック建築、左官、溶接、塗装
東淀川高訓	自動車整備、機械組立、溶接、塗装、家電サービス
下館高訓	溶接

(5) 職業訓練を受けることによって、現在の社会における競争原理の中ですぐに就職することを期待すること自体に矛盾があるのかもしれない。

企業内部で対応しきれない人材、大企業が排出した人を公共訓練が引き受けて、わずか6ヶ月で新しい技能を付与し、社会復帰させるということは所詮、無理であろう。再雇用の機会が保障されるのはむしろ例外とみる見解もある。だが、中高年訓練生は再雇用を強く要望し、その意味で公共訓練の受講を位置づけている場合が多い。

(6) 面接中にみられた発言を分類すると、次表のようになる。

調査対象者 \ 分類	訓練生	指導員
視覚	11	13
運動感覚	10	18
記憶	21	13
情緒・動機づけ	24	9

(7) 訓練生の発言を調査者が要約すると、行間にある微妙なニュアンスがあらわせない。そこで、やや冗長になるが訓練生の声、指導員の声をなるべく忠実に表現した。

(8) 中高年者固有の学習困難点を明確に抽出すべきであろう。現段階では若年者の困難点を調査していないので結論づけることはできない。ただし、若年者と共通している学習上の困難でも中高年者の場合、学習環境条件が少しでも悪くなったり、加齢とともに各人の小さな欠点がいくつか積み重ねられると、技能・知識の習得に微妙に影響するようである。中高年者に固有の学習困難点として、諸研究者間で共通しているのは記憶の問題である。

(9) 視覚効率を規定する要因の一つは、最大瞳孔の大きさが小さくなっていることがあるから、同じ明るさの場合、若年者に比べて目にはいる光量が老人では少ないという特徴がある。した

がって、高齢者の作業での視覚効率を上げるには、照度をうんと高めることでそれが達成できる。(齊藤：1979)

(10) 中高年者は記憶力が弱いといわれるが単純にそのように結論づけるのは誤りであるという見解もある。(Blomly : 1974)

(11) 直接記憶力の低下は著しく、相当の高齢になってから全く異質の労働に習熟して適応するには、かなりの困難が一般的にいえば伴うとしなければいけない。(齊藤一：1979)

(12) 中高年者の情緒の特性を考えれば、授業の場ではあまり強制されたり、規制されるのを好まない。ゆえに、可能な範囲で開放的な雰囲気をつくるのが学習困難を克服させるひとつの鍵となろう。

(13) 諸氏のあげている中高年者の長所・短所を整理すると次表のようになる。

<p>(長所)</p> <ol style="list-style-type: none">1. 豊富な経験、技術、技能を生かせる。<ul style="list-style-type: none">・仕事の熟練度が高い。・経験が豊かだから理解が早く、深い。2. 仕事が慎重、正確である。<ul style="list-style-type: none">・慎重で経験があるので事故をあまり起こさない。・責任感、安定した習慣をもつのであまり監督がいらぬ。3. 自分のする行為を主体的に選択している。<ul style="list-style-type: none">・明確な目的をもって学習するわけだから、自主的・自発的・意欲的である。4. 「見通し」にもとづく全体的把握に強い。5. 人間関係を大切にする。<ul style="list-style-type: none">・忠誠心があり、協力的である。
<p>(短所)</p> <ol style="list-style-type: none">1. 新しい知識・技能に適応しにくい。<ul style="list-style-type: none">・変化への適応能力が低下する。2. 作業の速度がおちる。3. 記憶力、頭の回転力が低下している。4. 論理的、分析的な精密さを要する思考が弱くなる。

(14) Belbin・E(1965)があげた、訓練プログラムを壮年層に向くようにする場合の留意点

1. 課題が短期記憶を必要とする場合には
 - a) 意識的に記憶させなければならないような課題は与えないようにする。学習者に、キュー-を利用させることによって、意識的に記憶させなくとも学習させることができる場合が多い。

- b) 可能ならば、課題を、全体の構造を把握しやすいような方法で学習させること。もし部分的に学ばせねばならないのならば、累積的に学ばせること。
 - c) 次の課題、あるいは同じ課題の次の部分へ進む前に、それまでの学習のまとめをさせること（自己テストやチェックが重要である）。
2. 他の活動や他の学習による「干渉」がある場合には
 - a) コースで学習させる活動の範囲を制限すること。
 - b) 学習時間を、若い学習者の場合よりも長めにとること。
 - c) コースの内容よりも、学習の方法をさまざまに変化させてみること。
 3. 情報のあるメディアから他のメディアへ翻訳する必要がある場合には
 - a) 論理の変更や提示の仕方を変更しなければならないような視覚教材の使用はさけること。
 - b) シミュレーターやその他の教育訓練用機器を使用するならば、することが即学習になるように機械を設計すること。
 4. 壮年の学習者が何かを「学習解消」する必要がある、学習者がそれを予測できる場合には
 - a) まず、「正確な」学習が成立するよう工夫すること。
 - b) 学習者が誤りを納得できるように、自動的なフィードバックのシステムをとり入れること。
 5. 課題の学習のペースをコントロールする必要がある場合には
 - a) 学習者に自分のペースで学習させること。
 - b) ある限度を定めて、その範囲内で学習者に学習のやり方を自分で計画させること。
 - c) 他人の学習していることに気をとられずに、自分の目標に向かって学習を進ませること。
 6. 課題が複雑になる場合には
 - a) 教材が複雑になるときは、易しいものから順次的確にむずかしいものへと進めること。
 7. 訓練生が自信を持ってない場合には
 - a) 指示を記述して示すこと。
 - b) 訓練では、実際の生産に用いる材料を使って実習することをあまり急がないこと。
 - c) 帰納的な方法で学習させる時間を長くすること。新しい機械で仕事をさせたり、新しい職種に就かせる場合には、徐々にゆっくり行うこと。
 - d) 訓練生が単位時間に行わなければならない仕事量を少なくすること。
 - e) 試験の形式をとったテストは避けること。
 - f) コースを終了するのに要する時間を制限しないこと。
 8. 学習が心理的に受身に行われるようになった場合には
 - a) 発見学習ができるような開放的な雰囲気を作ること。
 - b) 具体的な教材や課題を与えて、成人にそれを挑戦する気持を持たせること。

(15) 橘寛勝(1971)は高年者の再訓練の可能性について、次のように述べている。

高年労働者について、その職務訓練なり再訓練する好適な方法は、今のところまだみあたらない。しかし訓練の重要なポイントは、知覚の面と直接記憶における顕著な変化についてであろう。研究の示すところによれば、最後の仕事量を採点して職務を評定するよりも、学習訓練過程を検討する方が重要だということである。老人における学習行動は、従来考えられていた以上に、教育、経験、習慣に依存するいわば個人的な過程であって、それに応じが千差万別の訓練や再訓練の方法が案出さるべきであり、それは個人的差異に適應するように融通性の豊か

なものでなければならぬということになる。要するに老人の過去の知識や経験を個々に生かすということではならぬ。

(16) 公共訓練の対象者は失業者であり、“dis advantaged group”であるから、特に工夫した教授法で訓練する必要などないという意識が指導者側に潜在している場合がある。それは誤った考え方である。

(17) Smith・K・U(1965)はフィードバック研究の必要性について次のように述べている。

われわれの考えでは、産業訓練の中心問題は、その訓練技術が、ほとんど常に、労働者の要求にではなくて、会社の要求に合致させられている、ということなのである。適当な誘因が与えられ、適切な態度と仕事に対する満足感が確立されれば、満足すべき行動が維持されると仮定されている。一方、それに代るべき方法というのは、学習の主要因は行動のフィードバック制御であることを強調し、労働者が、自己の反応パターンを制御する能力を高めるように、訓練事態をデザインすることである。この方法は、労働者を操作するのではなく、むしろ、労働者が自分自身の仕事をうまく操作できる人間になるよう助力するのである。このような強調点の転換は、空想的理想によるのではなく、健全な実利的根拠に基づいて正当化されうる、と信ずるにたる理由がある。

(18) 成人の学習について産業訓練場面と実験場面との両方から検討すべきことをBelbin(1965)は示唆している。というのは両場面からの知見はいつも一致するとはかぎらず、ましてや既に実験心理学で示されている知見をよせ集めても訓練への応用は不可能である。ゆえに、職業訓練領域において、フィールド調査と実験的研究とを独自のものとして実施していく必要がある。

(19) 現代社会の中で、生産労働者は技能の価値の相対的な低下に影響され自信を失ないかけている。けれども、労働者にとって技能の価値とは労働者の存在理由でもある。だから、技能を労働者自からの手でみがいていくとは不可欠なことであろう。

(20) 公共施設における中高年訓練が何を受講者に提供できているのか再確認すべき段階にきている。すべての年齢層をトータルにみて、職業訓練の体制を再整備する必要がある。